

人と組織の
新・論・点

CATALYST*

カタリスト

中村 園

造形作家の第一人者。スタッフ25名を率いる造形工房「アレグロ」代表

「ただ好きだから」の若者を 一人前に育てる



工房を設立して15年。スタジオジブリのキャラクターの立体作品やディズニーランドの舞台装飾・パレト小物などを制作しています。知名度の高い作品を制作するにつれ、「アレグロで働きたい」と訪ねてくる人が多くなりました。彼らは純粋にもの作りが好きです。個人で作品を作り、それを追求したいという人もいます。

しかしアレグロでは、「自分の好きなもの作り」だけをしているのではありません。もの作りは神様に感謝を表すために発したものです。「好きなものだけを作りたい」といって、どうやって生活していくのでしょうか。アレグロに入ったら、それを考えてほしいと思っています。

個人の作品と会社の仕事 その違いに気づかせる

今、工房で活躍しているスタッフは、もの作りが好きで会社の扉を叩いた人がほとんどです。縁あって入ってきたスタッフには、様々な仕事の機会を与えます。その中から得意なジャンルを見つけ、いいと

ころを育て引き出していきます。

もの作りの仕事で大切なのは、核心をつかむこと。クライアントは何を求めているのか。作品を鑑賞する人たちは何を期待しているのか。この視点を忘れてはいけません。

近頃、ドラえもんを使うイベント企画があり、スタッフに企画を任せるところ、ウケを狙った企画案を持ってきました。そこに「ドラえもん」という漫画のキャラクターはいません。個人の趣味で作る作品なら問題ありません。しかし会社としてする仕事では、クライアントがなぜドラえもんでやりたいのかを考えなくてはならないのです。

新たな価値を生む 生きたお金の使い方

昨年、思い立ってスタッフをラスベガスに連れて行きました。スタッフの作るものに、何か色気が足りないと思っていたからです。クライアントが満足するものに仕上がっても何か足りない、と。

砂漠の真中のラスベガスで上演されるショーは一流。富豪が常宿

とするホテルも一流。いろんな人種が集まる街。それを肌で感じてほしかったのです。

帰国後、その効果は目に見えて表れました。感覚や色彩、様々な形で。ラスベガスを共通に体験したことは、会社にとっても、個人にとってもずっと財産になります。そうなれば旅費は投資となります。

クライアントの求めているものだけを作ればいいとは考えません。それ以上の何かを生み出してほしいと思います。その為には先を見つめていかなければなりません。

先日、バルーンを使って何かできないかとスタッフに試作を依頼しました。裁縫技術を使った立体は大きなものが早く作れます。軽くて、持ち運びしやすい。それを何かに生かせると思ったのです。

試作品を見て、「これはいける」と思ったら、どの仕事バルーンに向いているかを考え仕事を取ります。そうなれば試作にかかった材料費も人件費も生きたものになる。

スタッフを適材適所に置きながらチャンスを与え、レベルアップを目指すことが大切だと思います。

文/内田美代子(編集部)

PROFILE なかむら・その

1947年、北海道生まれ。84年、人形作家としてデビュー。91年造形工房「アレグロ」を設立。人形作り、ジオラマ(立体模型)作りの第一人者として活躍。映画「ハウルの動く城」(宮崎駿監督)を基に企画した立体造形物展「ハウルの動く城 大サーカス展」が話題を呼んだ。著書に『もの作り ひと作り』『パロディねんど』がある。